

日本教育方法学会

第54回大会プログラム

前日 9月28日(金)	14:00	大会校企画「公開授業研究会」(和歌山大学教育学部附属小学校)
	17:00	
	18:00	
	19:30	全国理事会(ホテルアバローム紀の国)

第 一 日 9月29日(土)	8:30	受 付 開 始								
	9:15	課題研究Ⅰ 中等教育における「探究の過程」 重視の授業づくりと評価				課題研究Ⅱ 教育実践史から理論と実践を問い直す				
	11:15									
	11:20									
	12:10	総 会								
	13:00	休 憩								
		自由研究 1	自由研究 2	自由研究 3	自由研究 4	自由研究 5	自由研究 6	自由研究 7	自由研究 8	自由研究 9
	15:40									
	15:50	公 開 シ ン ポ ジ ウ ム 「資質・能力」の育成と授業研究								
	18:20									
18:30										
20:00	会 員 懇 親 会									

第 二 日 9月30日(日)	8:30	受 付 開 始							
	9:00	自由研究 10	自由研究 11	自由研究 12	自由研究 13	自由研究 14	自由研究 15	自由研究 16	自由研究 17
	12:10	休 憩 / 新 理 事 会							
	13:15	課題研究Ⅲ 道徳教育の基本と実践の探究				課題研究Ⅳ 防災教育の内容と方法			
	15:15								
	15:30	ラウンド テーブル ①	ラウンド テーブル ②	ラウンド テーブル ③	ラウンド テーブル ④	ラウンド テーブル ⑤	ラウンド テーブル ⑥	ワーク ショップ ①	ワーク ショップ ②
	17:00								

2018年 9月29日(土)・9月30日(日)
於 和歌山大学

大会参加要領

1. **会場案内**：会場は、和歌山大学です。会場への経路につきましては、次頁をご参照ください。
2. **受付**：両日ともに**8：30**からとなります。
受付は東1号館（教養教育棟）で行います。
 - ・大会参加費（『大会発表要旨』代を含む）は、一般会員4,000円、学生会員3,000円です。
 - ・当日会員（臨時会員）もこれに準じて受け付けております。
 - ・本年度までの学会費（一般会員8,000円、学生会員6,000円）を未納の方は、あわせてお納めください。
 - ・本年度の学会費を納入された方には、受付にて『教育方法47』をお渡しします。
 - ・会員懇親会の参加受付も行いますので、ふるってご参加ください。会費は4,000円となっております。詳しくは、15頁の「インフォメーション」をごらんください。
 - ・受付にてネームプレートを用意しておりますので、お名前をお書きのうえ、おつけください。
3. **昼食**：第一食堂(土曜日は11:15～13:00 日曜日は12:10～13:15)で営業しております。
4. **研究発表**：発表会場につきましては、4～5頁の「会場配置図」をご覧ください。
 - ・自由研究の発表時間は、以下の通りです。
 - 個人研究：発表20分 質疑10分
 - 共同研究：発表30分 質疑10分

（但し、口頭発表者が1名の場合は、個人研究に準じます。）
 - ・自由研究における共同研究発表者の氏名にある○印は口頭発表者を表しています。

〈交通手段のご案内〉

和歌山大学
(〒 640-8510 和歌山県和歌山市栄谷 930)

●アクセスマップ



〈和歌山大学へのアクセス〉

●JR和歌山駅をご利用の方

和歌山駅	和歌山バス 和歌山駅→和歌山大学	約 30 分 → (340 円)	和歌山大学 バス停 下車
------	---------------------	------------------------	--------------------

※和歌山駅よりタクシーの場合
約 30 分 約 3,000 円
東 1 号館 P-5 駐車場とお伝え下さい。

●南海本線をご利用の方

和歌山大学前駅	和歌山バス 和歌山大学前駅→和歌山大学	約 4 分 → (100 円)	和歌山大学 バス停 下車
---------	------------------------	-----------------------	--------------------

〈和歌山バス時刻表〉

●南海本線 和歌山大学前駅→
和歌山大学 (所用時間 : 4 分)

時	土曜	日曜
7		
8	28	28
9	13 43	13 43
10	11 43	11 43
11	00 20 43	00 20 43
12	00 20 40	00 20 40
13	00 20 40	00 20 40
14	00 20 40	00 20 40
15	00 20 40	00 20 40
16	00 20 40	00 20 40
17	00 20 40	00 20 40
18	00 20 40	00 20 40
19	00 20 49	00 20 49
20	19 49	19 49
21	19 49	19 49
22	19	19

●和歌山大学→
南海本線 和歌山大学前駅 (所用時間 : 4 分)

時	土曜	日曜
7		
8	05 53	05 53
9	13 46	13 46
10	13 38 58	13 38 58
11	18 38 58	18 38 58
12	18 46 58	18 46 58
13	18 38 58	18 38 58
14	18 38 58	18 38 58
15	18 38 58	18 38 58
16	18 38 58	18 38 58
17	19 38 58	19 38 58
18	18 38 59	18 38 59
19	18 45	18 45
20	16 45	16 45
21	15 45	15 45
22		

● JR 和歌山駅→和歌山大学 (所用時間 : 30~40分) ●和歌山大学→ JR 和歌山駅 (所用時間 : 30~40分)

時	土曜	日曜
7	04 42	04 42
8	22 50	22 50
9	23 50	23 50
10	15 35 55	15 35 55
11	15 35 55	15 35 55
12	15 35 55	15 35 55
13	15 35 55	15 35 55
14	15 35 55	15 35 55
15	15 35 55	15 35 55
16	15 35 56	15 35 56
17	15 35 55	15 35 55
18	15 36 55	15 36 55
19	22 53	22 53
20	22 52	22 52
21	22	22
22		

時	土曜	日曜
7		
8	33	33
9	18 48	18 48
10	16 48	16 48
11	05 25 48	05 25 48
12	05 20 45	05 20 45
13	05 25 45	05 25 45
14	05 25 45	05 25 45
15	05 25 45	05 25 45
16	05 25 45	05 25 45
17	25 45	25 45
18	05 25 45	05 25 45
19	05 25 54	05 25 54
20	24 54	24 54
21	24 54	24 54
22	24	24

〈会場配置図〉



会場配置

受付 : 教養教育棟ホール
 総会 : 教養教育棟 G-103
 公開シンポジウム : 教養教育棟 G-101
 課題研究Ⅰ : 教養教育棟 G-103
 課題研究Ⅱ : 教養教育棟 G-102
 課題研究Ⅲ : 教養教育棟 G-103
 課題研究Ⅳ : 教養教育棟 G-102
 自由研究 1・10 : 教養教育棟 G-201
 自由研究 2・11 : 教養教育棟 G-203
 自由研究 3・12 : 教養教育棟 G-205
 自由研究 4・13 : 教養教育棟 G-206
 自由研究 5・14 : 教養教育棟 G-207
 自由研究 6・15 : 教養教育棟 G-301
 自由研究 7・16 : 教養教育棟 G-302
 自由研究 8・17 : 教養教育棟 G-304
 自由研究 9 : 教養教育棟 G-305

ラウンドテーブル① : 教養教育棟 G-201
 ラウンドテーブル② : 教養教育棟 G-205
 ラウンドテーブル③ : 教養教育棟 G-206
 ラウンドテーブル④ : 教養教育棟 G-207
 ラウンドテーブル⑤ : 教養教育棟 G-301
 ラウンドテーブル⑥ : 教養教育棟 G-304
 ワークショップ① : 教養教育棟 G-305
 ワークショップ② : 教養教育棟 G-306

会員控室 : 教養教育棟 G-202

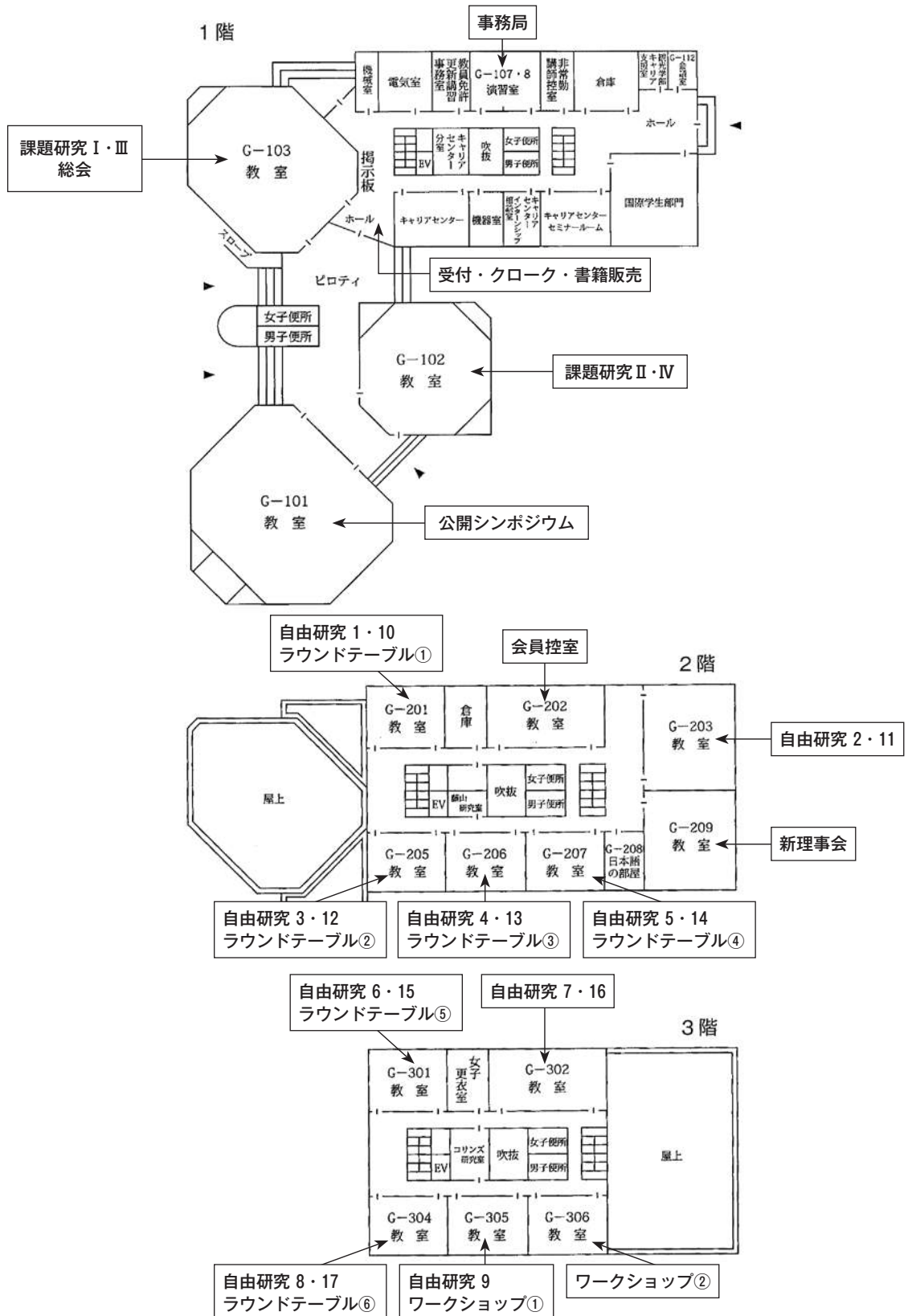
クローク : 教養教育棟ホール

事務局 : 教養教育棟 G-107・G-108

新理事会 : 教養教育棟 G-209

* 会員懇親会の会場は、第一食堂です。

〈東1号館（教養教育棟）配置図〉



9月28日(金) 14:00~17:00

大会校企画

和歌山大学教育学部附属小学校における公開授業研究会

大会前日に、和歌山大学教育学部附属小学校において、公開授業及び研究協議会を行います。参加は無料です。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

〈参加申し込み〉

資料の用意等の関係から、9月21日(金)までに、日本教育方法学会事務局 hohojimu@riise.hiroshima-u.ac.jp へお申し込み下さい。ご連絡いただく必要事項は、ご氏名・ご所属・連絡先(住所・電話番号・mail address) 参加希望の授業、です。

※当日参加も可能ですが、資料を用意できない場合があります。

〈プログラム〉

14:00~14:10	受付	15:30~16:40	分科会
14:10~14:30	全体会	16:45~17:00	全体会
14:35~15:20	公開授業		

〈公開授業〉

コメンテーター

1-C	授業者 南 拓哉 (体育科)	子安 潤 (中部大学)
	单元名「煙玉ドン (ネット型ボールゲーム)」	
4-C	授業者 岩崎 仁 (理科)	大野 栄三 (北海道大学)
	单元名「電流のはたらき」	
6-B	授業者 宮脇 隼 (国語科)	阿部 昇 (秋田大学)
	单元名「歴史でドキリ ～「作家史」と関連させて文学作品を読もう～」(「イーハトーヴの夢」「やまなし」)	
5・6-F	授業者 矢出 大介 (総合的な学習の時間)	西岡加名恵 (京都大学)
	单元名「和歌山城 PR プロジェクト～5分間に思いを込めて～」	

※ビデオ・写真撮影はご遠慮願います。

■和歌山大学教育学部附属小学校までのアクセス

住所 〒640-8137 和歌山県和歌山市吹上1丁目4-1

TEL 073-422-6105 FAX 073-436-6470

HP <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp/>

※ご来校の際は、公共交通機関をご利用ください。

○和歌山駅および南海和歌山市駅をご利用の方

和歌山バスにて「真砂町」もしくは「県庁前」下車。徒歩5分

※さらに詳しい情報については、随時、学会ホームページ上でお知らせいたしますので、そちらをご確認ください。

9月29日(土) 9:15~11:15

課題研究 I

中等教育における「探究の過程」
重視の授業づくりと評価

(教養教育棟 G-103)

コーディネーター・司会者

池野 範 男 (日本体育大学)

大野 栄 三 (北海道大学)

提案者

岩 間 徹 (平安女学院中学校高等学校) アドバンスング物理研究会と探究を重視した授業展開

二 宮 衆 一 (和歌山大学) 探究学習のための評価のあり方

指定討論者

石 井 英 真 (京 都 大 学)

〈設定趣旨〉

中等教育の改革が求められている。アクティブ・ラーニングに代表される授業づくりや、大学入試、高校入試で何をいかに評価するのが議論されている。次期学習指導要領では、中等教育段階、特に、高等学校の教科目に探究科目が増設され、探究の過程を重視した授業づくりが具体的課題になっている。しかし、高等学校の教育は大学入試が変わらなければ何も変わらないとまで言われている。

本課題研究は、現在進行中の中学校、高等学校の改革において、探究の過程を重視した授業づくりとその評価に焦点化し、そのねらい、目標、内容、方法、そして、評価のどこをどのように変革し、これからの教育を創り出すべきなのかを解明しようとするものである。高等学校(中等学校)における理科、数学科、社会科・地理歴史科・公民科の授業づくりや評価の改革に着目し、我が国や諸外国の事例を検討することによってこの課題に迫る。

9月29日(土) 9:15~11:15

課題研究Ⅱ

教育実践史から理論と実践を問い直す

(教養教育棟 G-102)

コーディネーター・司会者

子安 潤 (中部大学)
田上 哲 (九州大学)

提案者

佐藤 英二 (明治大学) 遠山啓における実践と理論
—生活単元学習批判の射程—
鶴田 清司 (都留文科大学) 国語科教育における理論と実践の関係を考える
—文芸教育研究協議会を中心に—

〈設定趣旨〉

教育において理論と実践はどちらも重要なものである。大学の教員養成や教師教育では、理論と実践の往還や融合の必要性について盛んに論じられ実際にそのためのプログラムが構築されてきた。一方、学校現場では「理論は実践の役に立たない」といった昔ながらの通説や、近年では理論を方法と同一視し、ある理論（方法）がうまくいかなければ別の理論（方法）に簡単に乗り換えるという事態も見受けられる。これまで以上に急激に変化する行き先の見えにくい時代を迎え、教育において理論と実践は一層重要なものとなりその関係が問われることになろう。

本課題研究では、今後の教育における理論と実践のあり方とそれらのかかわり方についての示唆を得るべく、戦後実践研究に取り組み教育現場の教師に影響を与えた民間教育研究団体とそれを理論的に支えたキーパーソンに焦点を当て、実際に理論と実践がどのようにとらえられてきたかということの検証を試みてみたい。

自由研究1

(教養教育棟 G-201)

司会者：井ノ口 淳 三 (追手門学院大学名誉教授)
田 端 健 人 (宮 城 教 育 大 学)

- 13:00 ① 場面緘黙のある軽度知的障害児の学習過程と教師の教授の特徴
—特別支援学校における数学の授業の事例分析—
楠 見 友 輔 (東京大学大学院)
- 13:30 ② コルチャックにおける「子どもの権利」の思想と実践
松 浦 明日香 (広島大学大学院)
- 14:00 ③ ロレンツォ・ミラーニの教育実践に関する考察
—社会科教育としての側面に着目して—
徳 永 俊 太 (京 都 教 育 大 学)
- 14:30 ④ 現象学的教育学の研究方法としてのエピソード記述の可能性と課題
宮 原 順 寛 (北 海 道 教 育 大 学)
- 15:00 ⑤ 教育実践研究における事例に関する研究
—例外的事例と省察の「自己否定」の方向性—
○田 上 哲 (九 州 大 学), 池 田 竜 介 (九州大学大学院)
茂 見 剛 (九州大学大学院)

自由研究2

(教養教育棟 G-203)

司会者：豊 田 ひさき (中 部 大 学)
三 上 勝 夫 (北 海 道 文 教 大 学)

- 13:00 ① 東井義雄における「教科の論理」に関する一考察
—主体的・対話的で深い学びに向けて—
齋 藤 義 雄 (東京家政学院大学)
- 13:30 ② 島小の教育実践
—学校づくりにおける公開研究会を中心に—
狩 野 浩 二 (十文字学園女子大学)
- 14:00 ③ 上田薫の授業研究論に関する一考察
—動的相対主義の理論と授業研究の方法に着目して—
杉 本 憲 子 (茨 城 大 学)
- 14:30 ④ 教師に必要な授業指導力・生徒理解対応力を育成する「<分かちあい>活用の授業実践」に関する実践研究
—直面した指導課題をとりあげる『臨床的教師研修』適用:「教育心理学(2年~)」対話能力育成、「実習科目(3・4年)」授業力・授業研究力育成への発展的指導—
○小 島 勇 (東京電機大学)
○徳 武 隼 人 (東京電機大学・学部生)
○大 木 茂 樹 (東京電機大学・学部生)

自由研究3

(教養教育棟 G-205)

司会者：奥平康照(和光大学名誉教授)
高橋英児(山梨大学)

- 13:00 ① 「場所に根ざした教育 (place-based education)」の理論と実践
山根万里佳(広島大学大学院)
- 13:30 ② 学習対象への自我関与を通じた子どもの価値観の形成
ー地域社会の問題を追究する中学校公民の授業を事例にー
丹下悠史(愛知東邦大学)
- 14:00 ③ 在日外国人児童生徒教育の研究集会にみる多文化共生
ー教育実践に関する報告内容の検討を通してー
磯田三津子(埼玉大学)
- 14:30 ④ 「学校に地域を作る」市民性育成の試み
ー佐賀市立嘉瀬小学校の15年間の取組から考えるー
○永野篤子(佐賀市中央児童センター)
○村岡智彦(KSVN(嘉瀬小学校ボランティアネットワーク))
○赤星まゆみ(西九州大学)

自由研究4

(教養教育棟 G-206)

司会者：安彦忠彦(神奈川大学)
藤原顕(福山市立大学)

- 13:00 ① 教科横断的・汎用的な学力形成に関する考察
ー文芸教育研究協議会「認識方法」、関西大学初等部「思考ツール」の実践を通してー
村尾聡(龍谷大学大学院)
- 13:30 ② 「正統的周辺参加」論を取り入れた総合的な学習の時間の授業デザイン
境野仁(埼玉県深谷市立八基小学校)
- 14:00 ③ 二つのPBLの相互関連性の考察
ーコンテンツとコンピテンシーの分離を超えてー
広石英記(東京電機大学)
- 14:30 ④ 専門職の資本と学び合うコミュニティを育む授業研究の持続・発展・進化の道標
ー要因・価値・モードに着目してー
木村優(福井大学)
- 15:00 ⑤ 授業実践の様相ー解釈的研究
ーカリキュラムの展開過程の明示化ー
田代裕一(西南学院大学)

自由研究5

(教養教育棟 G-207)

司会者：折出健二(人間環境大学)
金井香里(武蔵大学)

- 13:00 ① 授業場面で活用される教師の実践的知識
—児童に関する知識の事例研究—
藤井真吾(筑波大学大学院)
- 13:30 ② 野村芳兵衛の生活指導観
—「協働自治」と信仰の関係を中心に—
北島信子(桜花学園大学)
- 14:00 ③ 生活指導研究における「意識化」の問題
佐藤雄一郎(広島大学大学院)
- 14:30 ④ 授業における生徒たちの「やり過ぎ」方略についての一考察
—一定時制高校の事例をたよりに—
伊藤晃一(千葉大学大学院)
- 15:00 ⑤ 学級経営の困難さと教師像に関する研究
○片倉徳生(北海道文教大学大学院), 三上勝夫(北海道文教大学)

自由研究6

(教養教育棟 G-301)

司会者：市川博(横浜国立大学名誉教授)
竹内元(宮崎大学)

- 13:00 ① 道德教育の方法をめぐる一考察
—N.ルーマンの社会システム論に基づく実践記録分析から—
劉博昊(東京学芸大学大学院)
- 13:30 ② ドイツにおける倫理科(Fach Ethik)への懐疑的・超越論的批判
—W.フィッシャーらによる「実践倫理」への批判を手掛かりに—
平岡秀美(筑波大学大学院)
- 14:00 ③ グループ学習を活用したダイナミック・アセスメント
—中学校社会科における試み—
谷口(平田)知美(和歌山大学)
- 14:30 ④ 話し合い活動における価値の共有に関する研究
—中学校3年社会科授業の分析—
埜寄志保(名古屋大学)
- 15:00 ⑤ 道德における「規則の尊重(規範)」と「寛容(ケア)」の相克
○村瀬公胤(麻布教育研究所), ○岸本琴恵(名護市教育委員会)

自由研究7

(教養教育棟 G-302)

司会者：遠藤貴広(福井大学)
三村和則(沖縄国際大学)

- 13:00 ① 校内授業研究におけるリーダーシップ
有井優太(東京大学大学院)
- 13:30 ② 逐語記録にもとづく授業分析のモンゴルへの導入
—小学校算数授業を対象にして—
○NORJIN DULAMJAV(名古屋大学・研究員)
大谷尚(名古屋大学), 柴田好章(名古屋大学)
- 14:00 ③ 問題解決における図の働きと役割
—アレイ図を使った「わり算」の等分除と包含除の統合—
奥村利香(日本体育大学大学院)
- 14:30 ④ 算数・数学の授業から小中一貫・連携を考える
井上正允(元・佐賀大学)
- 15:00 ⑤ 高等学校数学における協同的問題解決過程の分析
—生徒の理解状態の推移を中心に—
○田中真帆(名古屋大学大学院), ○花里真吾(名古屋大学大学院)
○向井昌紀(愛知県立名古屋西高等学校), 柴田好章(名古屋大学)

自由研究8

(教養教育棟 G-304)

司会者：小川博久(東京学芸大学名誉教授)
三村真弓(広島大学)

- 13:00 ① 国民学校期における上田友亀の器楽教育論の特質
藤井康之(奈良女子大学)
- 13:30 ② 「理解」をもたらす音楽科カリキュラムに関する研究(1)
—21世紀型学力の育成に関わる現状と課題—
岡本信一(兵庫教育大学)
- 14:00 ③ 幼児教育は「遊び」にどうかかわるのか?
—「純粹経験」への回帰としてみるいま一つの〈援助〉—
伊澤貞治(皐月幼稚園)
- 14:30 ④ K. Gravemeijer と P. Cobb の「デザイン研究」の意義
伊藤伸也(金沢大学)

司会者：安藤輝次(関西大学)
的場正美(東海学園大学)

- 13:00 ① 学級活動における話し合い活動が有する合意形成機能の検討
—分節構造に基づく逐語記録の再構成による分析を通じて—
清水克博(名古屋大学大学院)
- 13:30 ② オランダのイエナプラン教育における教育評価に関する一考察
—真正の評価論の視点から—
奥村好美(兵庫教育大学)
- 14:00 ③ 工業高校英語教育における個別学習を重視した授業スタイルと評価方法の実践
中西毅(和歌山県立和歌山工業高校)
- 14:30 ④ Instructional Rounds における授業分析法の可能性と課題
○廣瀬真琴(鹿児島大学), 木原俊行(大阪教育大学)
森久佳(大阪市立大学), 宮橋小百合(和歌山大学)
深見俊崇(島根大学)
- 15:00 ⑤ 小中一貫校における乗り入れ授業の教師にとっての意味
—中学校教師の語りの中心に—
藤江康彦(東京大学)

9月29日(土) 15:50~18:20

公開シンポジウム

「資質・能力」の育成と授業研究

(教養教育棟 G-101)

司会者・コーディネーター

西岡 加名恵(京都大学)

船越 勝(和歌山大学)

提案者

秋田 喜代美(東京大学) コンピテンスの育ちの過程を共有する授業研究

ー学びの物語としての経験カリキュラムとペダゴジー

小谷 祐二郎(和歌山大学教育学部附属小学校)

コンピテンシー・ベースへの転換で授業はどう変わるのか?

松下 佳代(京都大学)

「資質・能力」のオルターナティブ・モデルにもとづく授業デザイン

<設定趣旨>

グローバル化の進展や AI の開発などを背景として、従来の学力の範疇に収まらないコンピテンシーの育成が各国で推進されている。日本でも、2017・2018年改訂学習指導要領では、「資質・能力」の育成が謳われている。「資質・能力」育成の方針については、未来の社会に生きていくうえで必要な力を保障することが期待されている。しかしながら一方では、経済の論理に教育を従属させるものである、子どもの社会的背景に左右される、教育内容の習得が疎かになる、といった批判も寄せられている。

そこで本シンポジウムでは、学校としてより良い教育実践につなげるために、どのように教育目的・教育目標を設定すればよいのか、さらに、そのような目的・目標の達成のために、どのように授業研究を進めればよいのか、について検討する。

インフォメーション

●会員総会

日 時 : 第一日(9月29日(土)) 11:20~12:10
会 場 : 教養教育棟 G-103
主な議題 : 会務報告
2017年度決算
2019年度予算案
次期大会校

昼食・休憩前ですが、ぜひとも多数ご参集ください。

●会員懇親会

日 時 : 第一日(9月29日(土)) 18:30~20:00
会 場 : 第一食堂
会 費 : 4,000円

会員相互の親睦をはかるため、懇親会を開きます。多数の会員のみなさまのご参加をお願いいたします。

●書籍販売について

学会事務局では、受付にて学会機関誌『教育方法』、研究紀要『教育方法学研究』、『大会発表要旨』の最新刊およびバックナンバーを、大会割引価格で販売いたします。この機会にぜひお求めください。

なお、『教育方法』最新刊(第47巻)は、本年度の学会費を納入された方には、受付の際にお渡しいたします。大会以降に学会費を納入された方には、随時お手元に郵送いたしております。

9月30日(日) 9:00~12:10

自由研究10

(教養教育棟 G-201)

司会者：久野弘幸(名古屋大学)
白石陽一(熊本大学)

- 9:00 ① 「授業を見る主体」の形成に関する試論
—重松鷹泰の「授業分析」に着目して—
茂見剛(九州大学大学院)
- 9:30 ② 現代ドイツにおける教育的指導論の再編
早川知宏(広島大学大学院)
- 10:00 ③ 改革教育学の批判的継承としての学校実験「イエナプラン・ヴァイマール」
(Schulversuch Jena-Plan Weimar)
—生活との差異に基づく学校改革の構想とその実践—
田中怜(筑波大学大学院)
- 10:30 ④ OECD-CERIの「カリキュラム開発」プロジェクトに関する研究
—「羅生門的アプローチ」とは何か—
八田幸恵(大阪教育大学)
- 11:00 ⑤ 授業構想と展開のエビデンス
—新城市立新城小学校の事例の分析—
的場正美(東海学園大学)

自由研究11

(教養教育棟 G-203)

司会者：澤田稔(上智大学)
藤江康彦(東京大学)

- 9:00 ① 社会的構成主義としてのデューイ学習論の再検討
—デューイの言語観を中心として—
須谷弥生(広島大学大学院)
- 9:30 ② 低学年児童の学び合いにおけるペア形態の機能
森田智幸(山形大学)
- 10:00 ③ 「発達の最近接領域」と「協同学習」に関する諸問題の考察
村田純一(大阪大学)
- 10:30 ④ 授業アーカイブシステムを活用した授業省察及び分析に関する研究
—グループにおける発話分析を通して—
藤井佑介(長崎大学)
- 11:00 ⑤ 批判的リテラシー論の展開と教育実践の構築
黒谷和志(北海道教育大学)
- 11:30 ⑥ カリキュラム・マネジメントによるコンピテンス育成の長期的検証(Ⅱ)
—談話分析による質的検証—
○豊 寫 啓 司(福岡教育大学), ○柴 田 康 弘(福岡教育大学附属小中学校)
○坂 井 清 隆(福岡教育大学)

9月30日(日) 9:00~12:10

自由研究12

(教養教育棟 G-205)

司会者：鹿毛雅治(慶應義塾大学)
湯浅恭正(中部大学)

- 9:00 ① 戸田唯巳の生活指導実践における集団に関する一考察
—『学級というなかま』に焦点をあてて—
星川佳加(神戸大学大学院)
- 9:30 ② 初等教育における市民生活のための批判的思考力の育成
—思考ツールとストーリーの組み合わせを通じて—
メナ・アラヤ・アーロン・エリー(筑波大学大学院)
- 10:00 ③ 子どもの認知に着目した個別支援の授業づくり
—集団思考を促す教材研究を中心に—
松尾奈美(広島大学大学院)
- 10:30 ④ ペア学習の方法論
—K.J.トッピングに依拠して—
安藤輝次(関西大学)
- 11:00 ⑤ 中学校社会科授業における意見交流過程の分析
—中間項の拡張による発言の関連可視化と内容考察—
○中道豊彦(愛知県立半田高等学校), ○石黒慎二(名古屋大学大学院)
○久留島夕紀(名古屋大学大学院), ○柴田好章(名古屋大学)
塾寄志保(名古屋大学)

自由研究13

(教養教育棟 G-206)

司会者：阿部昇(秋田大学)
丸山範高(和歌山大学)

- 9:00 ① 今子どもたちが求める学び
—「陶冶と訓育の統一」の視点として—
広中真由美(広島大学大学院)
- 9:30 ② 自己表現を目指す作文教育方法の展開
—「現代化」以降のアメリカにおける議論を中心に—
森本和寿(京都大学大学院・
日本学術振興会特別研究員)
- 10:00 ③ 3人組・4人組における対話の様相と学習効果
—小集団学習は様子を捉えて書くことにどう生きるか—
大杉稔(大阪樟蔭女子大学)
- 10:30 ④ 小学校国語教科書教材の比較研究
—児童詩創作に向けた教科書活用—
今宮信吾(桃山学院教育大学)
- 11:00 ⑤ アクティブ・ラーニングを検証する
—小学校国語物語教材の読みの授業をめぐる—
三上勝夫(北海道文教大学)
- 11:30 ⑥ 校内授業研究会講師としての支援のあり方
—FAMアプローチを活用して—
○水野正朗(東海学園大学), ○副島孝(愛知文教大学)

9月30日(日) 9:00~12:10

自由研究14

(教養教育棟 G-207)

司会者：中坪史典(広島大学)
西岡けいこ(香川大学)

- 9:00 ① 幼小連携の取り組みについての考察1
—ある幼稚園の保育から—
安部 孝(名古屋芸術大学)
- 9:30 ② 園内研修における保育者の語り
—保育の質向上につながる子ども理解とは—
○太田 顕子(関西女子短期大学), 橋川 喜美代(関西福祉科学大学)
- 10:00 ③ 「経験喚起的環境」の再現による教育方法に関する一考察
—ロールプレイによる異文化理解を通して—
○飯塚 宜子(京都大学・研究員)
島村 一平(滋賀県立大学)
- 10:30 ④ 機械学習を用いた幼児の音楽教育支援の方法の考案に向けて
佐野 美奈(大阪樟蔭女子大学)
- 11:00 ⑤ 「個の幼児理解」を前提とする現行の保育理論を問うⅡ
—保育者が囚われている保育理念と行動の呪縛を解く—
○小川 博久(東京学芸大学), ○岩田 遵子(東京都市大学)

自由研究15

(教養教育棟 G-301)

司会者：北田佳子(埼玉大学)
森 久佳(大阪市立大学)

- 9:00 ① 生物多様性が注目される時代の教材に関する考察
—Eco-DRRの視点による「小学校理科における外来生物の扱い」—
長島 康雄(東北学院大学)
- 9:30 ② ポスト・ノーマル・サイエンスに向けた教育アプローチの開発
—市民として近未来の日本のエネルギー社会を問う—
酒井 雅子(東京成徳大学)
- 10:00 ③ 立ちすくむ福島
—新しい安全神話の創出と学校教育の役割—
土井 妙子(金沢大学)
- 10:30 ④ 単元レベルの授業の省察と授業改善を支援するシステムの運用評価研究
—単元レベルの授業研究を進めていく際の壁の検討と関わって—
小柳 和喜雄(奈良教育大学)
- 11:00 ⑤ 米国における「科学教育の現代化」と小学校教員の現職教育
—初等科学カリキュラムの開発過程に着目して—
宗近 秀夫(広島大学 研究生)
- 11:30 ⑥ 授業研究を通じたプロフェッショナル・キャピタルの構築に関する実証的研究(その1)
○千々布 敏 弥(国立教育政策研究所), ○小柳 和喜雄(奈良教育大学)
○木村 優(福井大学), 木原 俊行(大阪教育大学)
柴田 好章(名古屋大学)
サルカール アラニ モハメッドレザ(名古屋大学), 久野 弘幸(名古屋大学)

9月30日(日) 9:00~12:10

自由研究16

(教養教育棟 G-302)

司会者：片上宗二(安田女子大学)
福田敦志(大阪教育大学)

- 9:00 ① 初任期の語り
—理想との乖離と生産的な結び付き—
滝川弘人(東京大学大学院)
- 9:30 ② 「行為の中の省察」の方法論的考察
—<わざ art>との関係性に着目して—
池田竜介(九州大学大学院)
- 10:00 ③ 教師の即時的意思決定における児童・生徒理解
徳岡慶一(京都教育大学)
- 10:30 ④ 初任期(3年目)教師の実践知の形成
—福山市立大学教育学部卒業生を対象とした事例研究—
藤原 顕(福山市立大学)
- 11:00 ⑤ 教師視点の映像記録を活用した授業実践能力育成支援の試みⅢ
○平山 勉(名城大学), 後藤明史(名古屋大学)
谷口正明(名城大学), 竹内英人(名城大学)

自由研究17

(教養教育棟 G-304)

司会者：樋口直宏(筑波大学)
三橋謙一郎(徳島文理大学)

- 9:00 ① 大学における看護基礎教育課程の日米の比較
野口寿美子(奈良学園大学)
- 9:30 ② キャリア教育の視点による進路指導論
—教育指導法の観点から—
谷本寛文(京都光華女子大学)
- 10:00 ③ 学習科学としてのカリキュラム・マネジメントによる
市民的資質育成プランと実践的検証
—カリキュラム・マネジメント先行研究にみられる方略の傾向性析出の試み—
三浦研一(福岡市教育委員会)
- 10:30 ④ ドイツのカリキュラム議論における「多様さ」とのつきあい
—プレングル(A. Prengel)「多様さの教育学」思想を手がかりに—
田中紀子(岐阜経済大学)
- 11:00 ⑤ 職業体験活動が子どもにも与える教育効果に関する研究
—中学校における企業人材プログラムを生かしたキャリア教育に焦点をあてて—
武田祐子(九州大学大学院)
- 11:30 ⑥ 初等中等教育のキャリアポートフォリオのあり方
—時間的展望と深い学びの関連を通して—
○胡田裕教(名古屋大学大学院), ○角田寛明(株式会社リアセック)
清水克博(名古屋大学大学院)

9月30日(日) 13:15~15:15

課題研究Ⅲ

道徳教育の基本と実践の探究

(教養教育棟 G-103)

コーディネーター・司会者

梅原利夫(和光大学名誉教授)

久田敏彦(大阪青山大学)

提案者

得丸浩一(京都市立西京極小学校) 自己表現と道徳性(人間らしさ)の教育
—生活綴方教育に学びながら—

渡辺雅之(大東文化大学) 道徳科のベクトルを変える
—オルタナティブな実践とその理論—

藤井啓之(日本福祉大学) 道徳教育の構造的把握
—構成要素とその相互連関の発達論的検討—

〈設定趣旨〉

「特別の教科 道徳」は、今年度から本格的な動きが始まっている。小学校では、初めて作成された教科書を使用した教科の授業が実施され、学期末には記述式の評価も行われた。中学校では、検定を通過した8社の教科書が、8月までに各採択地区で採択決定され、来年度からの実施準備に入る。

高校では、道徳教育は科目「公共」「倫理」と特別活動とが「中核的」な分野であるとされ、数値評価される共通必修の「公共」の捉え方が話題にのぼってきている。小学校教育と連動して、幼児教育においても新しい方針のもとですでに道徳教育が実施されている。

これらを背景に、幼小中高を通した幼児・初等・中等教育において、道徳性を育てる教育の基本をどのように捉えたらいいのか、改めて深く問われている。授業や指導の実践開始段階に入った状況を踏まえて、その原理と実践のあり方を探って行きたい。

課題研究Ⅳ

防災教育の内容と方法

(教養教育棟 G-102)

コーディネーター・司会者

中野和光(美作大学)
田代高章(岩手大学)

提案者

森本晋也(岩手大学) 震災を生き抜いた子どもたちに学ぶこれからの防災教育
—釜石市の防災教育, 岩手県の復興教育の取組から—
梶本久子(和歌山市立楠見小学校) ふるさとに学び, ふるさとを愛する防災教育
—地域・学校・家庭をつなぐ—
竹内裕希子(熊本大学) 熊本における防災教育の事例

〈設定趣旨〉

これまで学校における安全教育の内容は, 生活安全, 交通安全, 災害安全に関する内容として取り扱われてきた(文部科学省『「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』(2010年))。ところが, 東日本大震災以降, なかでも災害安全に関する安全教育, すなわち防災教育に対する重要性が特に認識されてきている。今回の学習指導要領の改訂においても, 主な改善事項の一つとして, 防災・安全教育の充実が挙げられている。

このような動向において, 今日日本の防災教育は, 「命を守る防災教育」として行われていると思われる。例えば, 文部科学省の『「生きる力」を育む防災教育の展開』(2013年3月)では, 防災教育のねらいを「災害に適切に対応する能力の基礎を培う」としている。これに対して, より広く, 環境教育, 持続可能性の教育, 人間教育の一環として防災教育をとらえる立場もある。たとえば, ショウ・ラジブラの『防災教育—学校・家庭・地域をつなぐ世界の事例—』(明石書店, 2013年)は, 防災教育の進むべき方向として, 学校と家庭, 地域社会と家庭, 複数の学問分野, 複数の関係者, 自然と人間, 過去と未来が「つながる」ことに求めており, 防災教育の根底にあるのは環境教育であると述べている。前者も, 防災訓練を行いながら, 人間としての在り方生き方を問い, 家庭, 地域との連携, 各教科等における防災学習を行っている。後者も, 防災訓練を否定しているわけではない。その意味では, この違いは力点の差かもしれない。

日本教育方法学会の『東日本大震災からの復興と教育方法—防災教育と原発問題—』(図書文化, 2012年)は, 原発問題も含めて防災教育を取り扱っている。この書物の中では, 「日本列島に生きるものとしての客観的認識としての自然・社会・生活認識」「認識と行動の統一した教養としての防災教育」, 「教育課程の中心に震災・復興の問題を位置付けること」が提言され, 「稲むらの火」の濱口梧陵の「百年の安堵を図る」という言葉の重みが指摘されている。

本課題研究では, 「釜石の奇跡」と呼ばれる釜石市の防災教育とその後の岩手県の防災教育の取組, 「稲むらの火」を背景に持つ和歌山県の防災教育の取組, 環境問題の一環としての防災教育の取組にもとづいて, 防災教育の内容と方法について検討してみたい。

9月30日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル①

**「本質的な問い」「逆向き設計」を活かして
社会科授業を変えるにはどうすれば良いのか**
— 社会科教育学の視点からの議論 —

(教養教育棟 G-201)

企画者

渡部 竜也 (東京学芸大学)

提案者

渡部 竜也 (東京学芸大学)

堀田 諭 (東京大学)

岡田 了祐 (お茶の水女子大学)

〈設定趣旨〉

西岡加名恵氏が、ウィギンズやマクタイらの理論をベースに「本質的な問い」を設定し、その問いやその問いに対するパフォーマンスについての評価基準・規準を先に設定してから、授業計画を「逆向き設計」することを提案してから久しい。この間、西岡氏の研究協力校を始め、様々な学校で「本質的な問い」や「逆向き設計」に注目した授業が提案されてきた。このことは社会科も例外ではない。

「本質的な問い」や「逆向き設計」は、事実の網羅の授業を克服し、探求ベースの授業を現場に生み出すため、「真正の学び」を現場に生みだしていくための手順として登場してきたものである。網羅の授業が最も横行していると言っても過言ではない社会科分野では、特にこれらの概念に注目し期待する人が研究者だけでなく、実践家も含め、数多くいる。企画者もその一人である。

しかし現実にかような概念を活かして作成されている授業が、現場の社会科を大きく変革することに成功しているのかと問いかけた時、幾分か疑問が残る。もともと、中高の歴史教師を始め、こうした「本質的な問い」を用いる人は少なからずいた。「戦争がなぜ生じたのか。どうすれば戦争を防げたのか」と昭和史の冒頭に、文字通り「本質的な問い」を投げかける教師はその一例である。しかし彼らの授業は、大抵が十五年戦争についての情報の網羅のままであった。そして今、現場の「本質的な問い」や「逆向き設計」を謳った実践を見たとき、そのような実践と五十歩百歩の実践事例を少なからず目にする。

「本質的な問い」と「逆向き設計」の概念が、社会科授業の良い意味での変革をもたらすためには、どのようなことが必要になるのか。逆に何が妨害要件となっているのか。社会科教育学を専門にしている3人の研究者に提案してもらうことにした。一人は、近年ウィギンズとマクタイの理論との親和性が指摘されている、全米社会科教育協議会のカリキュラムスタンダードを研究し、このスタンダードを活かして実践する中学校教師と共同で研究している堀田諭氏。もう一人は、附属小学校との連携を通して「真正の学び」のアプローチを研究されている岡田了祐氏である。そして最後の一人は、企画者であり、ニューマンの「真正の学び」や、バートン&レヴスティクの歴史教育論に関心のある渡部竜也である。

ラウンドテーブルを通して、このテーマ及び3人の提案について忌憚のないご意見を頂戴したい。

9月30日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル②

演劇的知の教育方法学的検討 (5)

教員養成におけるドラマワーク

— 導入の意義および課題を中心として —

(教養教育棟 G-205)

企画者

渡部 淳 (日本大学)

司会者

深澤 広明 (広島大学)

提案者

宮崎 充治 (弘前大学)

共同研究者

三橋 謙一郎 (徳島文理大学), 武田 富美子 (立命館大学),
青木 幸子 (昭和女子大学), 和田 俊彦 (跡見学園高校),
宮原 順寛 (北海道教育大学), 渡辺 貴裕 (東京学芸大学),
中野 貴文 (東京女子大学), 藤井 洋武 (日本大学・非常勤講師)

〈設定趣旨〉

第1期の「教育方法のトポロジー」では、教育における演劇的手法の活用可能性を5年間にわたって検討した。第2期の「演劇的知の教育方法学的検討」の最終年にあたる今年には、教員養成段階におけるドラマワークの活用に焦点をあてて検討する。

2015年の中教審答申が「アクティブ・ラーニングの視点からの教育の充実のためには、教員養成課程における授業そのものを、課題探究的な内容や、学生同士で議論をして深め合うような内容としていくことも求められる」と述べていて、すでにロールプレイやPBLを取り入れた授業実践も実際に行われている。しかし、学生がいくつかのアクティビティを経験したり、プログラムの作り方を覚えたりするだけで、はたして教師としての力量形成につながるのか疑問が残る。

アクティブ・ラーニングの運用にあたっては、例えば、集団で学ぶ土壌をつくり、学習者に発言・表現を促し、彼らから発せられた言語的・身体的メッセージを感受し、プログラムを柔軟にデザインし直すなど、これまで教師に求められてきた力量とは異なった力量が求められるからである。

こうした問題関心に基づいて、本セッションでは、ドラマワークを用いたワークショップ型授業が教員養成にもたらす可能性と限界について検討する。

併せて、授業のあり方を青年期教育の課題と結びつけて検討する。長い受験勉強を経てきた大学生にとって、ドラマでの学びは、“学びほぐし (unlearn)”としての意味を持ち、脱文脈化された学習に文脈性をとりもどしていく活動にもなりうるからである。

今回は、小学校の現場で長く教員の資質形成に携わってきた宮崎充治氏から、小学校と大学、両方の実践を視野にいれて報告していただき、それをもとに討議を進めたい。

本ラウンドテーブルにこれまで参加したことのない会員のみなさまの参加も歓迎いたします。

9月30日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル③

日本型イエナプラン教育の実践可能性を探る

(教養教育棟 G-206)

企画者

溝邊 和成 (兵庫教育大学)

提案者

溝邊 和成 (兵庫教育大学)

奥村 好美 (兵庫教育大学)

田村 優弥 (兵庫教育大学・学部生)

〈設定趣旨〉

日本の教育界において、ペーターゼン(独)の「小さなイエナプラン」、いわゆるイエナプラン教育は、三枝孝弘・山崎準二訳(1984)「学校と授業の改革：小イエナ・プラン」で紹介されてきたが、オランダにおけるイエナプラン教育については、長く知られていなかった。しかし、最近では、リヒテルズ直子氏の一連の著書をはじめ、2000年に設立された日本イエナプラン教育協会の全国大会開催(2016, 2017, 2018)など、日本における認知度も高まってきている。また、2019年には、長野県に日本最初のイエナプランスクールが開校予定となっている。こうした機運の中、日本特有の教育文化の中に受け入れ、実践を確かにする理論的・実践的知見の構築が、今後の大きな課題といえる。

そこで、本ラウンドテーブルでは、「日本型イエナプラン教育」の確立を志向し、一般化していく作業過程として「何をどこまで準備しておく必要があるのか」をテーマとしたプレ・トークを設定している。そのための話題提供として、企画者兼第1話題提供者の溝邊は、かつて神戸大学附属明石小学校で取り組んだ過去の実践事例とともに、これからイエナプラン教育の考え方を取り入れて試みようとしている公立小学校での準備状況をもとに、実践のためのフレームづくりに見る要件について話題を用意している。また、オランダ教育研究を進めている第2話題提供者の奥村は、オランダにおいてはどのようにイエナプラン教育を受容し、オランダ型へと発展させてきたのかについて考察し、そこから日本型イエナプラン教育を考える際の枠組整理を試みる。第3話題提供者の田村は、実際のオランダでのイエナプラン教育の長期研修経験をもとに、必要な教授スキルを実践に役立つ情報として教員研修の立場から語る。

以上の話題を材料に参加者との意見交流を深め、教育方法学としての方向性と今後の具体的研究課題を共同生成する予定である。

9月30日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル④

実践の論理から「評価」概念を問い直す

— 日本語教育実践からの提案 —

(教養教育棟 G-207)

企画者

石井英真(京 都 大 学)

提案者

南浦涼介(東京学芸大学)

三代純平(武蔵野美術大学)

中川祐治(福 島 大 学)

〈設定趣旨〉

多くの場合「評価」といえば、個人の資質や能力を値踏みする、点数化や「評定」として捉えられがちである。だが、学びの可視化やその価値づけに関わる評価という営みは、指導や学習の改善にもつなげる。そうした評価行為の側面は、これまで形成的评价という形で概念化され研究が進められてきた。そして近年は、「学習としての評価 (assessment as learning)」といったキーワードで、教育実践や学習活動に内在的な評価機能から、「評価」概念の捉えなおしがなされてきている。しかし、評定目的であっても、改善目的であっても、これまで「評価」というと、個人を対象にその能力の判定や形成を目的合理的に行うものという発想は共通していたように思われる。権力関係や情報マネジメントに関わる「評価」という営みは、教師や子どものエンパワメントを促すことにもつながりうるし、子どもの学習の事実を中心に据えた人々の対話と共同の関係（「社会関係資本 (social capital)」）を生み出す力にもなりうる。学びの可視化（評価）が人々のつながりを生み出すという側面は、学習活動において日常的に生起しているが自覚的に追求されてきたとは言い難い。これに対して、個人の言語能力の形成だけでなく、「外国人に対する教育」という性質が向き合わざるを得ない社会運動的な側面ゆえに、近年学習共同体の形成自体も重視されるようになってきた日本語教育においては、人々がつながりやすいような、共同体形成につながるような学びの可視化を意識した実践も蓄積されてきたし、一定程度それを対象化する研究も進められてきている。本ラウンドテーブルでは、日本語教育の実践事例と議論の蓄積を紹介しながら、教育方法学分野における教育実践研究や教育評価研究の知見をふまえてその意味を検討することによって、教師あるいは学習者の実践共同体の構築という観点から「評価」概念を問い直す視座を提起したい。

9月30日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル⑤

教育方法学研究における歴史的アプローチ (その1)

—生活綴方教師 東井義雄と戸田唯巳の教育実践を手がかりに—

(教養教育棟 G-301)

企画者

豊田 ひさき (朝日大学)

森 久佳 (大阪市立大学)

司会者

豊田 ひさき (朝日大学)

提案者

足立 淳 (朝日大学)

齋藤 義雄 (東京家政学院大学)

星川 佳加 (神戸大学大学院)

〈設定趣旨〉

教育方法論ないし教育実践を歴史的に研究するアプローチとは、「史料を用いて過去の教育方法、教育実践を実証的に解明する研究方法」(富士原紀絵2014「第4章 質的研究方法 第1節 歴史的アプローチ」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社、p.70)のことを指す。

教育実践史研究の大きな特色の1つは、このアプローチを援用する研究者自身が、今日における現実の教育方法や教育実践に対して大いに関心を寄せ、また、深いレベルで関わっている場合が多い点であろう。ただし、その際に留意すべき点もある。たとえば、今日の教育課題等と歴史的アプローチで見出される知見とを安直に結びつけないよう努めることは言うに及ばず、実証性を追求することが当然であるとはいえ、資史料それ自体を重視するあまり、結果的にそうした資史料の紹介・解題にとどまらないよう心掛けることもまた、肝要だと言えよう。

では、今日、こうした歴史的アプローチに求められる観点とはどのようなものであろうか。この研究方法の醍醐味は、歴史学によって求められる高い実証性と資史料の新規性を志向しつつも、教育方法学研究者としての立場や視点によって資史料自体の解釈が多様になるということが実態である。その上で指摘されているのが、「分析者の有する視点も社会的・歴史的に形成されてきたものである」こと、また、「資料を通して過去と向き合うことは現在の自分のものの見方、フレームワークと向き合うことであり、そこで自覚された視点は現在の実践の理解を深めて行くことに資するであろう」(前掲書、p.73)という点である。

本ラウンドテーブルは、こうした問題意識を念頭に企画されるものである。今回は、その第一歩として、「生活綴方的教育方法」を実践した教師である東井義雄と戸田唯巳を検討する。提案者それぞれの研究の中間報告という形で、それぞれの研究の立場・視点からのアプローチの共通性と固有性、加えて、そうした研究のスタンスやアプローチの枠組み(フレームワーク)自体をも問い直す再帰的な検討にまで踏み込み、これからの我が国における教育実践の歴史的アプローチの可能性と課題を明らかにする議論の土台を提供できればと考えている。

9月30日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル⑥

D. ショーン『省察的実践者の教育』をどう読んだか —「行為の中の省察」をめぐる実践事例の再検討—

(教養教育棟 G-304)

企画者

遠藤 貴 広 (福 井 大 学)

提案者

松 本 圭 朗 (福 井 大 学 大 学 院)

史 嘉 宜 (福 井 大 学 大 学 院)

遠 藤 貴 広 (福 井 大 学)

〈設定趣旨〉

2017年2月に、ドナルド・ショーン (Donald A. Schön) の主著、*Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions* (1987) の日本語完訳『省察的実践者の教育—プロフェッショナル・スクールの実践と理論—』(柳沢昌一・村田晶子監訳)が刊行された。ショーンの著作については、すでに前著 *The Reflective Practitioner* (1983) の部分訳『専門家の知恵』(佐藤学・秋田喜代美訳, 2001) と完訳『省察的実践とは何か』(柳沢昌一・三輪建二監訳, 2007) が刊行されており、特に「行為の中の省察 (reflection-in-action)」という視点は日本の教育方法学研究にも大きな影響を与えている。「行為の中の省察」については、『省察的実践とは何か』の第2部(佐藤・秋田訳では未訳)で取り上げられている諸分野の実践事例とその跡づけ方、そして同書全体の叙述形式と構成の仕方にその本質が埋め込まれている。しかしながら、日本の先行研究に目を向けると、これらの事例が取り上げられることなく、技術的エキスパートから省察的実践者への転換を求めるとき、「技術的合理性」との対比で思弁的に論じられたり、「行為についての省察」と対峙させられたりしてしまうことも多かった。このような状況の中、企画者らは2018年度前期に大学院の授業で『省察的実践者の教育』をテキストに、ショーンが取り上げた実践事例とその跡づけ方に注目した検討を行った。本ラウンドテーブルでは、建築スタジオでのデザイン学習等、「行為の中の省察」とその教育を考える上で重要な位置づけにある実践事例をどのように捉え直すようになったのかを、大学院生のレポートを交えて参加者と共有したい。これを通して、「follow me」「joint experimentation」「hall of mirrors」といった省察的実習を支える新たなアプローチについても実践事例から離れずに理解・共有する方策を探りたい。

9月30日(日) 15:30~17:00

ワークショップ①

授業逐語記録にもとづく比較授業分析

—モンゴル算数授業における課題と概念理解の関係を中心に—

(教養教育棟 G-305)

企画者

柴田好章(名古屋大学)

提案者

サルカール アラニ モハメッド レザ(名古屋大学)

久野弘幸(名古屋大学)

NORJIN DULAMJAV(名古屋大学・研究員)

〈設定趣旨〉

本ワークショップでは、過去7年間の国際比較授業分析のワークショップの成果をもとにし、提案者らが協同して研究を進めている比較授業分析を行う。今回は、モンゴルの小学校の算数授業の逐語記録と映像にもとづいて、比較授業分析を行い、異なる国の授業の共通性や差異を明らかにする。これを通して、文化を越えて互いに有益な知見を見いだすことをめざしている。

ワークショップでは、まず、提案者側から、分析対象授業の紹介を行う。そして、参加者も、授業逐語記録を読みながら、比較授業分析を行い、意見交換をする。今回の授業分析では、算数授業(分数)における課題と概念理解の関係に着目する。

比較授業分析によって、国を超えて、授業あるいは学習という事象における共通する知見や課題が明らかになると予想される。また、両国の教育の制度や文化背景を考慮しつつ比較文化論的に考察することによって、授業の有する文化的固有性や共通性についても明らかになると予想される。モンゴルの授業の分析を行うことを通して、日本の授業のあり方を問うことにつながることも期待される。参加者も交えてディスカッションを行い、授業という複雑な事象に対する研究アプローチのあり方を考えたい。

9月30日(日) 15:30~17:00

ワークショップ②

授業デザインに位置づく仮説生成模擬授業の体験(3)

(教養教育棟 G-306)

企画者

鉄口 真理子 (鳴門教育大学)

提案者

岡寺 瞳 (大阪成蹊大学)

清村 百合子 (京都教育大学)

小林 佐知子 (畿央大学)

衛藤 晶子 (畿央大学)

〈設定趣旨〉

本ワークショップでは「仮説生成模擬授業」を通して、教師自身の「行為の中の省察」を促すという教員養成の教育方法を参加者と共有し、近年求められている教師の資質・能力育成の可能性を見出すことを目指している。

私たちは10年前から「仮説生成模擬授業」という模擬授業を開発してきた。それは、従来の模擬授業のように教師の指導技術の具体的な改善を直接に目指す立場をとらない。また、熟練教師をモデルとして初心者が見習うための模擬授業という立場をとらない。「仮説生成模擬授業」の特徴は、模擬授業の中で学習者役が何か違和感を覚えたところで授業を止め、参加者全員でその違和感を解消するために案を出し「実験」してみるところにある。そして実験の中で省察し、また新たな案を仮説として出し、それを実験する。このような実験と仮説との螺旋的な連続によって、参加者全員で授業をつくりかえていくのである。「仮説生成模擬授業」の場は、現実の教室ではないが、つねに理論と実践を往還させる実験室の役目を果たす。

本ワークショップは3年目となる。「仮説生成模擬授業」は現在のところ音楽の授業を材料としているが、1回目は「仮説生成模擬授業」は教科の枠を越えて実施が可能だということがみえた。2回目はいろいろな立場の方々に共通理解をしていただける論理の必要性がみえた。3回目となる今回は「仮説生成模擬授業」の体験を行い、そのあとにその体験を材料にして、実験(行為)と仮説(省察)の関係について意見交流をしたいと考えている。

日本教育方法学会刊行書籍

教育方法13.	いま授業で何が問われているか	1 9 8 3	(2,400円)
教育方法14.	子どもの人間的自立と授業実践	1 9 8 5	(2,800円)
教育方法16.	個性の開発と教師の力量	1 9 8 7	(2,400円)
教育方法17.	教育方法を問い直す	1 9 8 8	(2,900円)
教育方法18.	新教育課程と人間的感性の育成	1 9 8 9	(1,940円)
教育方法19.	知育・徳育の構想と生活科の指導	1 9 9 0	(1,709円)
教育方法20.	学校文化の創造と教育技術の課題	1 9 9 1	(1,709円)
教育方法22.	いま、授業成立の原則を問う	1 9 9 3	(1,806円)
教育方法23.	新しい学力観と教育実践	1 9 9 4	(1,806円)
教育方法25.	戦後50年、いま学校を問い直す	1 9 9 6	(1,903円)
教育方法26.	新しい学校像と教育改革	1 9 9 7	(1,800円)
教育方法27.	新しい学校・学級づくりと授業改革	1 9 9 8	(1,960円)
教育方法28.	教育課程・方法の改革 —新学習指導要領の教育方法学的検討—	1 9 9 9	(1,860円) (価格は本体価格)

〒114-0023

東京都北区滝野川7-46-1

明治図書

TEL.(編)03-5907-6620

TEL.(営)048-256-2337

『教育方法』は、大会当日、会場にて大会割引価格にて販売いたします。
この機会に多数の方々のご購入をお願いいたします。
『教育方法29』より、図書文化から出版されることになりました。

教育方法29.	総合的学習と教科の基礎・基本	2 0 0 0	(1,800円)
教育方法30.	学力観の再検討と授業改革	2 0 0 1	(1,800円)
教育方法31.	子ども参加の学校と授業改革	2 0 0 2	(1,900円)
教育方法32.	新しい学びと知の創造	2 0 0 3	(1,900円)
教育方法33.	確かな学力と指導法の探求	2 0 0 4	(1,900円)
教育方法34.	現代的教育課程改革と授業論の探求	2 0 0 5	(1,900円)
教育方法35.	学習意欲を高める授業 —どのような学力を形成するか—	2 0 0 6	(2,000円)
教育方法36.	リテラシーと授業改善 —PISAを契機とした現代リテラシー教育の探究—	2 0 0 7	(2,000円)
教育方法37.	現代カリキュラム研究と教育方法学 —新学習指導要領・PISA型学力を問う—	2 0 0 8	(2,000円)
教育方法38.	言語の力を育てる教育方法	2 0 0 9	(2,000円)
教育方法39.	子どもの生活現実にとりくむ教育方法	2 0 1 0	(2,000円)
教育方法40.	デジタルメディア時代の教育方法	2 0 1 1	(2,000円)
教育方法41.	東日本大震災からの復興と教育方法：防災教育と原発問題	2 0 1 2	(2,000円)
教育方法42.	教師の専門的力と教育実践の課題	2 0 1 3	(2,000円)
教育方法43.	授業研究と校内研修 —教師の成長と学校づくりのために—	2 0 1 4	(2,000円)
教育方法44.	教育のグローバル化と道徳の「特別の教科」化	2 0 1 5	(2,000円)
教育方法45.	アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討	2 0 1 6	(2,300円)
教育方法46.	学習指導要領の改訂に関する教育方法学的検討 —「資質・能力」と「教科の本質」をめぐって—	2 0 1 7	(2,200円) (価格は本体価格)

最新刊・教育方法47. 教育実践の継承と教育方法学の課題 —教育実践研究のあり方を展望する—

〈内 容〉

- I 戦後教育と教育方法学
- II 教育実践研究におけるエビデンスとは何か
- III 教育方法学の研究動向

〒112-0012

東京都文京区大塚1-4-5

図書文化

TEL. 03-3943-2516